養老川流域の歴史散歩

海上地域の古代養老川

平成 20 年 9 月 11 日

総の国をかたる会
白鳥　　元治

1．郡衙の地域

(1) 姉崎古墳群から

姉崎古墳群の中で最古の古墳が、今富の正光院境内に存在する。**今富塚山古墳である。**墳丘長 110m、後円部 72m、高さ 12m、前方部幅 31m である。底部穿孔壷の破片などから、これまで姉崎天神山古墳に先行する時期で、市内でも最古の古墳であろうといわれてきた。現在のものは後円部の墳丘は削平され、後円部と前方部のに墳丘を横切る切通しができている。ここは台地状の先端で、北側に下ったところに（東海中学校）**前川**の上流になる水路があり、低地の沖積地が広がっている。**今津川と前川**の源流は、今富からさらに高い台地となる引田・立野となっている地であり、光風台団地方面のゴルフ場となっている。あるゴルフ場内では、まだ地下水が噴出している池もあり、立野川となって有秋地区を流れ、椎津川となって流れ込んでいる。

今富塚山古墳：後円部と前方部が切通しのように切断されて道になっている。

かつての姉崎海岸から、海保・今富までの古代養老川に沿って、姉崎古墳群がある。姉崎古墳群の中で最終段階の古墳といわれるのが、六孫王原古墳（前方後方墳・全長 45m）で、7 世紀中頃と考えられている。（金銅製馬具・直刀・須恵器大甕等が出土）このことは古墳時代の終焉を意味し、6 世紀の国造制の成立と共に、中央政権が強化されていった。それまで古代養老川流域を中心に、谷水田や養老川の自然堤防がつくった沖積地で水田の開発をすすめ、多くの労働力を統括していた共同体の首長が「上海上国」という地域の一

族たちであったといってよい。今富塚山古墳・天神山古墳――＞釈迦山――＞二子塚古墳――＞原 1 号墳――＞六遜王原古墳という古墳の築造は、この一族がこの地域の首長権を受け継いでいったことを示すものといってよい。天神山古墳（4 世紀中頃）から六遜王原古墳（7 世紀中頃）まで、その権威の象徴は 300 年間も継続したことになる。この 300 年間が一族の継承であろうとみる向きがあるが、どうであろうか。いまのところ実証できることでもない。地域内での首長としての権威と権力闘争は、常にあったにちがいない。またさらに遡ると、上総のこの地にやって来た人々は、稲作・鉄器文化を携えて西から来てことは、間違いのないところであろう。だからここは、「海の向こうの国」・「海の上の国」という西の古代人が描いた地であったにちがいない。

（2）水運としての古代養老川　　（国分寺～西広台地）

①地勢を眺める

筆者は、国分寺台から西広台地上から眺めた以前の風景が好きであった。特にまだ住宅地にそれほどなっていなかった頃である。**前広神社**が鎮座する台地の先端から、眼下に広がる田植えの終わった田圃は美しくもあり、壮観であった。前方は西野から海上地域に広がる。眺望の東は養老川、西は海保へと続いている。そして養老川が真ん中をくねって流れている。この風景から太古は、このあたりまで海の入り江であったのだろうかと、実感して想像したりできる。この**前広神社の後方上**が、**西広貝塚**である。市原郡誌の「西原」という項で、中古より市西荘といってきた西広村に、前広神社があるがこの神社は三代実録に載っている古社であり、貞観 10 年（868）9 月 27 日に五位下を授従していると記している。そして、西広はこの前広神社の前広からきているとしている。神社名は、前方に広がって展開するこの眺望からきているにちがいない。

同じく市原郡誌の「地勢」の項に、「北は丘陵地にして 36 メートルの高度を有し、東西に連なる。丘陵の南直下は養老川副て養老川平野東西に連なる。南西平野の盡くる所は海上村より、東海村姉崎町に亙る丘陵して、風景富む。養老川は本区より殆ど南に亙りて遠く養老村堀の内付近の丘陵を望むを得べし」とある。

国分寺から西広台地上は、古代人の日々の生活の舞台であり無数の遺跡（縄文～弥生～古墳時代）が展開している。そして律令政治の国分寺・尼寺・国府（未確定）があり、上総國の拠点ともなった場所でもある。

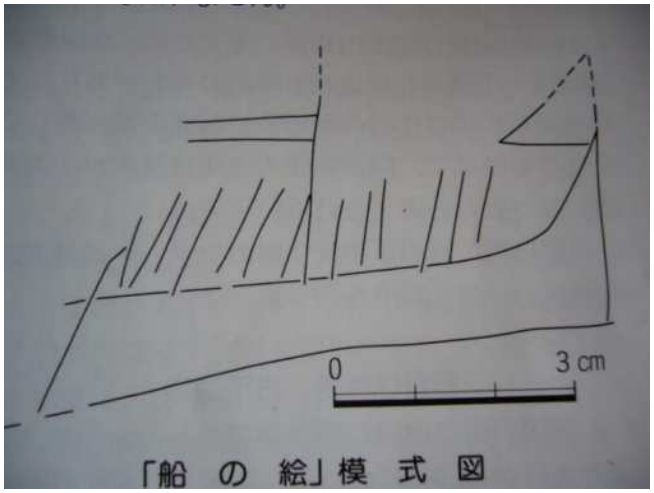
②線刻画のある壷形土器から

天神台遺跡は、諏訪台古墳群の下層にあたる遺跡である。この天神台遺跡の弥生時代後期から終末にかけての竪穴住居跡から、船の線刻画の壷形土器が出土している。（土器に描かれた船　　弥生～古墳出現期を中心として　研究紀要Ⅱ（財）市原市文化財センター　1993 年）

ここは、西広橋から国分寺台へと上る入り口にあたり、上・下諏訪神社があるところである。その境内からあたり一帯にあり、台上からは西広堰と海上方面（西野・糸久・権現堂・浅井・分目・神代）が見渡せる場所である。

広報「私たちの文化財　19　文化財センター　1992, 6, 10」の中で、「天神代遺跡出土の土器に船の絵」と題して、「～船の絵はこの土器の胴部中央に焼成前に鋭利な工具によって

線刻され、横 8cm・高さ 3.7cm の大きさで、船首を右に船尾を左に向け直線的な線で描かれています。船首先端の舳に三角の旗状の物を備え、船体中央にてマスト状の棒がたち、棒の先には二本の帯を風になびかせているようです。船体から上に伸びる線は櫂を表現していると思われ、櫂は 13 本存在し櫂の数から察して、この船の絵の描き手はやや大型の丸木舟に舷側板（げんそくばん）を付加した、外洋航海可能な準備造船的な船をモデルにしたのかもしれません」とある。



左　天神山遺跡出土の壷の線刻画
船の絵の弥生時代の土器は、奈良県で 6 例、全国で 15 例ある。伊勢湾以東の東国では静岡県三和町・埼玉県大宮市の 2 例があり、天神台遺跡で 3 例目の出土になる。（私たちの文化財 19 より）

弥生時代のこの頃から、相当大きな船が海上潟から古代養老川を上る水運交通があったといってよいのだろう。律令体制になって、古代養老川は、上総國へ入る玄関口として重要な河川交通となっていたにちがいない。

● **古代養老川で運ばれたものとして考えられること**

山倉 1 号墳から出土した人物埴輪

荒川沿いの鴻巣市生出塚（オイネヅカ）埴輪窯跡で、焼かれたものであることが証明された。山倉 1 号墳は、養老川を見下ろす西広台地上にある。南埼玉郡の元荒川の川底から、古墳時代の単材刳舟が引き上げられている。石材や埴輪をはこんだのだろうと推測されている。

●上総国分寺の七重塔の心礎

巨大な房州石がつかわれている。筏で修羅舟をしたてて、荷そのものを船で引いたか。　（修羅舟　　平田舟　　石を運ぶための舟のこと）

山倉 1 号墳から出土した人物埴

上総国分寺の七重塔の心礎

③今富廃寺（海上寺）

西野から小折・十五沢に続く自然堤防上の西側で、現東海中学校に隣接した田圃の一画に、今富廃寺がある。今は周りを田に囲まれて、一段高くなって雑草に被われて保存されている。字名を**「坊ケ谷」**という。東海中学校付近は古代養老川の流路であり、隣の町田・廿五里に「上前川」としてその流域を残していることは、これまで記してきた通りである。この辺りには、旧市町村名として「東海村」・「海上村」・そして、高沼・海保・海士有木といった地名を残している。そして「小折」は、郡衙の推定地とされている。

「海上地域の遺跡分布と古代養老川の推定流路」
平成 16 年度　市原市文化財センター　遺跡発表会より

律令体制になって官道がつくられ、駅伝制で島穴駅ができた。島穴は天羽駅と連絡しており、下総國へと通じる官道の駅であり、近くには海上潟という自然の良港を擁した古代養老川の河口付近であった。（上総國は 4 駅で備用の馬の数は 5 頭であった）

上総國 4 駅は、天羽・藤潴・大前・島穴の各駅である。

古代養老川を遡れば、郡衙・国分寺・国府へ、さらに上総の中央の長柄郡へと向かう河川交通として、重要な役割を果たしたにちがいない。水運は現代からは想像以上のものであったでろう。今富廃寺は白鳳期の上海上国造の寺院で、7 世紀末に建立されたと考えられている。当時は海上寺と呼ばれていたかも知れない。古代養老川沿いに建てられた上海上国造の氏寺なのである。郡衙と推定される「小折」は養老川に沿って、東方 2km の所にある。

今富廃寺跡
（左の樹木内は東海中学校である）

町田の上前川の水路
この先廿五里・野毛・島野・島穴神社へ流れる。

中央から上総のこの地にやって来る人々、あるいは受領（国司）として、地方役人に派遣された人々は、古代養老川を遡り、国府・国分寺の入り口にあたる郡の役所である、小折へ向かったにちがいない。それも古代養老川沿いに、五重塔が聳える大伽藍の海上寺（今富廃寺）を仰ぎ見ながら舟で向かったにちがいない。こんなことをとりとめなく考えていると、この位置に海上寺が建立されたことも、大きな意味をもってわかってくるような気がしてくるのだ。筆者が、今富廃寺跡を撮影したりして資料の収集をしていた時に、農作業中の神代在住の立野高見氏と今富在住の錦織勇氏と出会った。その話題である。

丁度ここは宮原集落の台地の先端から、東海中学校方向へのびている農道上である。字「上田」があり、その先 200m 先で二手に分かれる。この地点から左手に曲った所に、今富廃寺跡がある。距離は 100m 位である。「ここは宮原と今富そして高沼の分岐点であり、小字が**塔ケ崎**という。今富廃寺跡辺りの小字名は**坊ケ谷**であるという。そして錦織氏は、まだ文化財保護法のない時代の頃なのだろう、散在していた**布目瓦**を荷車で運んで農道に敷いたりしたことがあったという。文化財としての価値が認識するようになってからなのであろうか、立野氏は拾った瓦を、ある人に依頼して市役所へ届けたという」

「市原郡誌」にこのことに触れた記事がある。「～七堂伽藍でその壮厳さは国分寺を凌いだほどといわれてきました」・「五重塔の転倒して、その先が届いたことをもってその地の名を塔ケ崎という名をつけた～布目瓦が発掘されたという口碑が信じられている」という。

また「市原郡誌」の「東海村」の中で**「古川溝渠」**として次の記述がある。

「市原郡の西北に在り、海保村より起こり青柳村に至りて東京湾入る。延長一里余、本溝は養老川古昔の流線にして変換の後その跡を残すものなり。今や海保・廿五里・柏原・野毛・島野諸村にありては沼の状をなし、～白塚村においては、川状をなしこれを川田川となす。青柳村に至りて幅三十余間に及びこれを**前川**と称す。～港状をなし船舶時々来り泊しその便多し。**(上総国誌稿)**」とある。そして、たびたび水害にみまわれて、治水の堤防工事をくり返していることが記載されている。

「上総国誌稿」は明治 20 年（1887）頃に、内務省地理局が編纂した地誌である。この頃の古代養老川の流路であった地域の様相が分かる。

(3) 西野遺跡群

標高 8～10m 前後の自然堤防上にあるこの沖積低地は、西から今富・宮原・十五沢・小折・浅井小向井と繋がっている。そして、何回も指摘するように小折は、郡衙推定地とされてきた。これまで西野地域の発掘調査は、何回かおこなわれてきたようだが、国道 297 号線バイパスに伴なう発掘調査をきっかけに海上郡衙跡として注目されてきたが、郡衙家にかかわる施設であると特定できる遺跡は出なかった。それは、調査区が郡家中心部から外れていることもあ

図3 今富廃寺跡と海上郡衙跡周辺図 （小川ほか2005より） ▲伝国分寺系瓦出土地

るので、断定できなかったともいえる。しかし特に西野地区のある地点（今富廃寺と海上郡衙跡周辺図の**B 地点**　市原市歴史と文化財シリーズ゛第 11 輯　市原市地方史研究連絡協議会より）では郡衙の付属施設と考えられる倉庫を含め 11 棟以上の建物跡が規則正しく出土している。他の調査地点からは、古墳時代後期（6～7 世紀）の竪穴住居からなる集落跡、そして奈良平安時代の掘っ立て柱跡、井戸・溝などで構成されている施設が広く展開されていたことが分かっている。この地域を統括してきた豪族が、上海上国造が郡家として郡衙の役人になったであろうことは、想像してよい。

戦前、郷土史家の**小熊吉蔵**　氏（富津市出身と聞いている。君津郡内で教師を勤めていた）は、小折の語源は郡で小折は当て字であり、今富廃寺や姉崎古墳群との位置関係から、小折は海上郡家としたが、今では定説化している。「市原市歴史と文化財シリーズ　第 11 輯　平成 18 年度歴史散歩資料」の中の「海上郡衙跡と周辺の古代寺院跡」で宮本敬一氏は、「1967 年日野尚志氏は、小折の小字「子津（ネヅ）は郡津で郡家域内の河港であるとしていることや、西野の小字「子ノ神」（ネノカミ）は郡神である」ということを紹介している。また、「これまでの発掘状況から郡衙とは断定できる出土遺跡はないが、西野遺跡の周辺の数群から館や厨院の可能性の建物のブロックが見つかっており、十五沢・小折地区の微高知にまで及ぶ遺構の検出と地形の関係から、その中心が西野地区にあった可能性が濃厚です」といった興味ある記事を載せている。

(4)分目について

①地名について

分目は筆者の居住地であるので、これまで分目要害城はじめ分目に関わる話題のいくつかは、私見を小レポートにまとめてきた。この機会に古代養老川の流路に触れながら改めて考察してみたい。**分目**という地名は、鎌倉街道の分かれ道からきているう解釈が一般的であったのだが、最近では市原市の郷土史家の間では、「ワンメ」の「ワ」は輪・曲で、「メ」はせまくなった所の意とみられるという地形地名説が本当であろうといわれ、ある郷土史誌にもこの解釈を紹介している。さらにその根拠をこの地には、旧養老川の痕跡があるとしている。しかしこういった地形は、至る所にあるのにここがなぜここだけが分目なのか。全国的にもあまり無いと思う。筆者は過去に独善的であるが、過去に考察して小レポートにまとめてみたことがあった。まだ考えは変わらないので、簡単に再度ここに記しておくことにする。

地名として「分目」が初めて見られるのは、天正 19 年（1591）の「下総・上総検地」（太閤検地）実施後の文禄 3 年（1594）の「上総國海保郡分目之郷御縄打水帳」として、その名が記載されている（岡田利政文書）。一般的に地形からの地名は、古代からの地名であることが多い。倭名類聚抄記載郷からは、この地域は「市原郡福良（ふくろ）郷といわれ島穴郷の東、今富・小折・の辺り（深城・豊成・立野・風戸・高根・馬立・宇田・安須・高坂あたりまでか　日本地理誌料より）で、「ふくろ」とは川が蛇行して袋状になった地とか、山の端が袋状になっている地からという説もある。**与宇呂保**（養老）も同じような地形からか、周りがすこし高く足裏の中央のように、少しへこんだような地形からきているという説がある。「海保・今富・与宇呂保」は、古代からの地名である。しかし海上地区の現在の多くの

地名は、中世以降であろう。**分目**は、検地による村切りによって生じた十数戸の村として生じた郷名である。そして分目要害城の近くに古道があった。筆者はこの古道を意識するようになってから、分目という地名は要害城と古道との関わりから生じた地名と考えるようになった。近世の村の成立にはいくつかのパターンがあるというが、分目の村の発祥は要害城に字寝小屋があるように、彼ら農民たちであると考えてよい。元々要害城にあった寺（慈願寺）が、現位置に移動していることが発掘によって分かっている。現位置の寺の辺りを分目の中で、本村（ホムラ）と町会内で称している。（分目は本村・雲内・外分目と三区分されている）の本村とは、検地後の村切りによって最初の村がここから成立したにちがいない。文禄時代の供養塔が寺にある庄屋の岡田家は寺に隣接して本村にあり、屋号を「カミ」（上ということか）と言っている。こんなことを考えると、寝小屋の農民たちがここに移動して村を作ったに違いないと考えるようになった。これまで、村は要害城と切っても切れない存在であったにちがいない。要害城は古街道とも切っても切れない要害施設でもあった推察できることから、少し理屈で考えてみたくなる。古街道と推定できる道は、雲内畑から分目集落内の路地となって小字「東門」といわれる脇を通る。（このことについては、過去に小レポートにしてあるので詳細については、触れないことにする）そして姉崎～茂原線の県道に出る。広がる前の田圃の字名が、**「出戸」**である。「出戸」とは、「木戸」であるし城の「門」ということと同じである。「目」には監視するとか、見張るという意味がある。「目代」・「目付け」・「目明し」とか「横目」・「目当て」・「目利」・・・のように様々な言葉が古くからあるが、その根底に「目」そのものに「わける」とか「しなさだめ」という意味がある。「ワンメ」は「メワケ」であったかもしれないのだ。要害城は、**メワケ**の地であったのだ。単純にまたは要害城の地が、なんらかの区分とか境界的な意味があり、分かれの地点であったかもしれない。

分目要害城は農民たちの「見張り場・監視所」として、「ワンメ」という農民たちの呼称であったかもしれない。この砦というべき城は、以前小レポート**「分目要害城はなぜ無名なのか」**でとりあげている。そして前身は近距離に隣接する万台城・神代城から発展的に築城された、この地の有力な名主連合の農民たちの自前の城であるという仮説から出発している。ここではこのことは省略したい。独善的ではあるが、いまのところ筆者一つの考えとして主張しておきたい。尚おもしろいことに、海上地区の地名・字名に地形名はほとんどない（神代・引田・宮原・塔ケ崎・塔ケ谷・小折・西野・権現堂・新生・・・）。地形名と想われるのは、（安須・高坂・・・）等で少ない。

しかし、**「ワン」は輪で、「メ」は狭くなった処という説**も否定はできないところがある。上地区の地形図の概観をみると、検地後最初の集落が成立したと思われる処、**字本村**の地形はこの狭く輪になっているからである。再度指摘するようだが、こういった地形は至る所存在する。先・埼・崎といた方がよい。なぜせここが「ワンメ」なのか。当然、ワンメ集落はこんな狭い処の一部ではない。集落を作った農民は、要害城の寝小屋にいた人々であったと想像してよい。

遺跡の分布と立地環境(1/25,000)　（「姉崎地域の地質」（徳橋・遠藤1984）と遺跡分布地図を基に作成）

第3図　分目要害遺跡周辺地籍図（カッコ内は屋号　アミ部は水田・沼・湿地）

②分目要害城と村上城（村上堀の内）

字「村上堀の内」は、上総村上氏の居城とされてきた。「市原郡誌」にも、村上城跡について記載されている。297 号バイパス沿い村上の「堀の内」から、国府小学校前のにかけて字名に「下川」・「下川田」・「中川田」があるのは、古代養老川であったことをものがたっている。東関東自動車の建設に伴なう発掘調査でも、旧河道が明確に確認されており市原市史別巻にも「西野～平田へ至るこの付近はメアンダーになっていた」と記されている。一方「市原市史誌」（総説編）の中に「市原郡地質図」が掲載されているが、その地図には養老川の支流として柳原～分目～神代～立野への流路が記入示されている。「市原郡誌」の初版が大正 5 年だから、この頃の養老川といってよい。この養老川の支流が、分目要害城の寝小屋に入り格好の外堀の役目を担っていたことは、間違いない。そればかりか中世頃のこの支流は、水運を担うと共に、養老川を挟んで前方の村上城と密接な関係を築いていたにちがいない。上総村上氏と分目要害城の城主（筆者は名主連合と推測している）とどういう関係であったか興味のあるところだが、さまざまことが想像できる。全くの想像の世界にもなるので、ここでは省略する。上総村上氏は鎌倉公方の奉公衆であり、年貢の請負人ともいってよいのだろう。分目などこの養老川中流地域は、村上氏の支配・管轄下であったことは、間違いのないところだが、この時代はその関係は単なる上・下関係以上に独自性があったとみたほうが、**「無名分目要害城」**の実態に合っているような気がする。ではこの上総村上氏のルーツは、どこにあるのだろうか。本テーマから逸脱するので、参考程度に記す。

● 村上氏について〈信濃村上氏〉

市西郡は、上総権介広常が頼朝の嫌疑で謀殺され上総氏から千葉氏へ、宝治合戦により千葉秀胤（上総権介秀胤）から足利氏が上総守護になっている。上総村上氏は、鎌倉期に足利氏が守護になり奉公人として被官の列に連なっていたといわれている。信濃村上氏とそのルーツに関係がありそうだが、しかしよく分からないことが多い。河内源氏をその租とする信濃村上氏の中で戦国時代、武田信玄と対決した村上義清はよく知られている。信濃國の更級郡に村上郷がある。この村上郷名に姓の由来があるとされている。藤原宗忠の「中右記」に

よると、白河上皇を呪詛した罪で配流された地が村上郷だったとされているが、よくはわからない。また信濃にもともと所領を有していたともいわれる。保元・平治の乱に活躍した一族の名が記されている。その後の源義仲の軍とともに、平家追討にも参加している。鎌倉時代には、源頼義・義家父子の系統でないため重要な地位の登用はなく、一御家人という地位に甘んじていたようである。南北朝時代の一族は、南朝と北朝に分かれて参戦していた。村上水軍の祖といわれる村上義弘は、南朝について活動していた。一方足利尊氏の弟足利直義軍に加わって倒幕に加担し、新田義貞軍を破って塩田庄を与えられた一族もいた。この系統が信濃（小笠原氏）の反守護勢力となって、足利持氏に協力した記録がのこっている。この一族なのだろうか、足利氏が上総守護になったことから上総の地に入部したと考えられる。

● 長野県史中世編２より　　信濃総領家の話

信濃村上氏の総領村上満信の子の植清が関東公方足利持氏に属し、永享の乱で持氏自害の後は、信濃を去って上総久留里に住した。その子成清も関東公方成氏に仕え、旧領の信濃に帰ったが勢いが衰え、また久留里に戻り成氏の孫小弓御所足利義明に仕えたが、北条氏康の攻撃にあい自殺したとする系図を載せている。関東公方に忠節を尽くし出仕していた村上総領家であったが、信濃に戻ってみたらすでに義清の系統に連なる坂城村上氏が大きい力を発揮していて居づらくなり、久留里へと去っていった話である。

●上総村上氏について　　（字　村上堀ノ内）

上総村上氏が上総の地に来たのは、鎌倉時代の宝治合戦（1247）後に足利氏が上総守護になってからのことで、足利氏の被官となってそれにともなって移住してきたのではないかと考えられている。南北朝になると上総守護代として、村上氏の名がみえる（鎌倉大草子）。時代は降りて 16 世紀になると、村上氏は小弓公方に服属していた。小弓公方滅亡後は、原氏と共に北条氏に属するようになったといわれている。おそらく椎津氏と同様、上総地方の在来勢力として、対里見勢力の北上阻止を担った境城の役割であったであろう。

大永元年（1521）頃、村上大蔵義芳という者が居城していた（市原郡誌）。そして永昌寺に村上氏の位牌があるという。

永昌寺：左に国府小学校の体育館が見える

永昌寺の本堂

村上城跡（市原の城・小高春雄氏編集発行より）

右側奥が字堀の内
手前が字宿　左奥に国府小学校が見える。

観音寺から眺めた堀の内と宿

● 養老川流域の中世在地領主たち

在地領主としては、養老川下流に**大坪氏・村上氏・有木氏**など有力な国人領主がいた。鎌倉中期以降、上総守護足利氏の被官になったようである。特に村上・大坪両氏は南北朝から室町期にかけて争論地に対する使節遵行使するなど守護代使節ないし、それに準ずる政治的立場を保持していたようである。武田氏・里見氏が勢力が大きくなると容易にその支配下にも成りえたのは、鎌倉公方の奉公衆としての伝統的被官たる一種の貴種性とその継続性にあったのだろう。

● 八千代市の村上氏

八千代市村上は、八千代市東部の地名である。この地域は平安時代に臼井氏の支配下、臼井庄となった。鎌倉時代に入り後、宝治合戦に敗れ臼井氏は衰退し、代わりに下総千葉氏が勢力を伸ばした。室町・戦国時代に千葉氏は分裂、その後千葉氏により臼井氏は滅ぼされる。このような中、北燐の米本に大規模な中世城郭である米本城が築かれ、村上氏が代々城主を受け継いだ。有名なのは村上綱清であるがこの地域は、市原市の上総村上に深い関係があるとされているが、今のところよく分からない。

(5)海郷・海部郷について

①海士有木と海郷

海士有木の名は、江戸時代に海士村と有木村が合併したことからついた。「海士」は「海」と書くことがあり、海郷とか海部が古代社会に存在していた。海郷といわれる地域は、何処だろうか。地名市原市海士有木の海士は、和名類聚抄記載郷の海郷の現地比定からいえば(日本地理志料)、「海士・有木・福増・山倉・西広・山田橋・小田辺」があげられるが、有木より五井までの養老川沿辺である。海辺郷(海郷)が多く存在するのは、伊勢湾に面する、伊勢・尾張・遠江に集中している。「記紀」の伝承や東国の出現期の古墳の実態を考えていくと、市原市の「海郷・海部郷」は、伊勢湾から航海に長じた人々が黒潮に乗って、はるばるこの地にやってきた海人集団であっただろうといわれている。古代における航海や漁撈などに携わる人々を指していた。海部は「航海・漁撈などに従事した朝廷の部」で、房総に進出してきた大和政権が海部としての居住地にしていったと考えられる。天長5年(828)の正倉院庸布銘文に**「海部郷戸主刑部小黒人」**とみえる。ちなみに、有木の語源は、「アラキ」という新懇地の名前であるという。

②門脇遺跡

市原・茂原線(県道13号)の松崎での「高滝導水管事業に伴う埋蔵文化財調査」によって、明らかにされた遺跡である。市原・茂原線(県道13号)の市原刑務所を(松崎自動車前も)通過してすぐ左側に分譲住宅があるが、その裏側がカントリークラブになっている。そのゴルフ場に沿うような道の導水管工事で発見された遺跡である。縄文期の土器のみならず、奈良時代(7～8世紀頃)の住居跡も出土している。この遺跡から出土した土器には、**「海里長」**という文字が残っていた。海郷の里長の一人がいたのだろうか。

市原市民グラフ掲載写真
(文化財センター保管)

県道13号線を挟んで反対側の養老小学校方面の畑にかけて、「法伝台遺跡」・「松崎中里遺跡」が存在し、縄文土器のみならず、7～8世紀の集落跡が出土している。人間の営みが、相当古くからこの地にあったことが分かる。しかし古代養老川が入り江となって、奥まで入り込んでいたであろうとしてもこの地は、養老川から離れた奥の台地上である。海郷の里長がいたように海人が集落をつくっていたのであろうか。市原市埋蔵文化センター(マキノ氏)に聞くと、市原・茂原線(県道13号)は、古道であるという。この道は長柄町**刑部(名代である)**へと通じている。この名代は古代大和政権が、律令体制以前に上総國の経営に乗りだそうとした頃の拠点の一つだったことを考えると、この松崎の台地は古代養老川の水運と陸路を繋ぐ重要地点であったかもしれなのだ。